

未来ガジェット研究所 メンバーファイル[2]

Future Gadget Laboratory Member File

キャラクターを深く掘り下げる特別企画 第2回はダルと鈴羽をフィーチャー!

本編のさまざまな“if”シナリオが楽しめる「線形拘束のフェノグラム」の魅力に迫っていく連載ページ。今号もプロデューサーの松原達也氏、ディレクターの梶岡俊彦氏、シナリオライターの木直孝氏のスタッフ3名と、各登場人物の声優陣の声を聞いていく。



Steins;Gate

シュタインズ・ゲート

線形拘束のフェノグラム



[ラボメンナンバー 003] 橋田 至

[ラボメンナンバー 008] 阿万音鈴羽

ラボメンのバックボーンに迫っていく連載企画の第2回。今回はサブキャラクターという位置付けながら圧倒的な存在感を持つ“ダル”こと橋田至と、未来からのタイムトラベラーで物語のキーパーソンとなる阿万音鈴羽の2人を紹介。本編での立ち位置を探るとともに、最新作「線形拘束のフェノグラム」のストーリーの見どころにも迫っていく。

PS3 AVG 4月25日発売予定

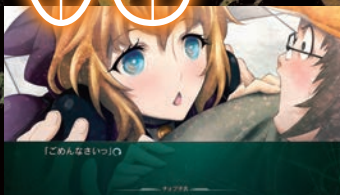
STEINS;GATE 線形拘束のフェノグラム

●5pb.
●¥7,140(税込)、数量限定版¥11,550(税込)

03

けん らん 絢爛仮想のファミファタール

——橋田 至 Bird Singing in Cage



「こめんなさいっ!」



▲コミマ会場で萌
部を捜していた橋
田は偶然コスプレ
イヤーの由季と出
会い、彼女にひと
目惚れる。

見た目はオタク、中身はHENTAI、名探偵ダル

ある日、チョップスティックガールと名乗る少女が“コミマで怪しいメモを渡された”というスレッドを立て行方不明になる。得意のハッキング技術を駆使して彼女の居場所を突き止めたダルが現場に向かうと、そこには拉致・監禁された阿万音由季の姿が――。

シナリオ：木直孝 原案：横谷昌宏

Actor's Voice

関 智一氏 Tomokazu Seki

ダルは楽しい存在なので、演じているとウキウキします。彼の魅力は何と言っても純粋なところですね。自分との共通点はオタクなところでしょうか(笑)。最新作の『フェノグラム』はまゆしいがかわいかったです。そしてどんなにドタバタしていても最後には泣けちゃうところはさすが『シュタインズ・ゲート』だと思いました。そこにシビれる憧れるう〜!

橋田 至 ITARU HASHIDA

岡部の友人の1人で、プログラムやハッキングの技術に長ける青年。重度のオタクでもあり、二次元萌えのほか、日常会話で@ちゃんねる用語を多用する。

CREATOR INTERVIEW プレイヤーの現実と ゲームの現実をつなぐ鈴羽

——続いては、鈴羽についてお聞かせください。
まずは彼女の立ち位置から。

林：鈴羽がいたことによって物語が大きく動き出すと言っても過言ではないので、とても重要なキャラクターですね。

松原：彼女は岡部たちとは育った時間軸が違うので“異物”なんですよ。そのため、いっしょに過ごす時間は少ないのですが、彼女のちょっとした行動で未来は大きく変わるんですよ。そういったタイムトラベルのキモのようなものを鈴羽を通して描きたかったんです。

林：あとはプレイヤーの現実とゲームの中の現実をつなぐ“ジョン・タイター”としての顔ですね。本作のストーリーをリアルに感じることができるのは彼女のおかげです

——鈴羽がダルの娘だという設定は、初期案からあったのでしょうか?

林：いえ、最初は岡部の娘にするかダルの娘にするかで迷っていましたが、岡部にした場合は、嫁が紅莉亜とまゆりのどちらなのか明言しなければならなかったのでそれはやめました。

——彼女のシナリオはこれまでの『シュタイン

ズ・ゲート』にないような、不思議な話ですね。

林：そうですね。このシナリオはかなり変化球になっています。しかし、ライターの新井輝さんがもともとキャラクターの掛け合いを得意としているだけあって、クオリティの高いものに仕上がりました。

——田村ゆかりさんの演技はいかがでしたか?

梶岡：このシナリオには3人の鈴羽の人格が登場するのですが、見事に演じ分けてくださいましたね。画面を見ていなくても、声を聞いただけでどの鈴羽なのかすぐにわかると思います。しかも、それが鈴羽というキャラクターをベースにしたうでの演技になっているということも驚きなんですよ。

松原：基本的には、1人で多人数の掛け合いをしていることになりますからね。

——収録はどのように行われたのでしょうか?

梶岡：「人格ごとの収録と、ストーリーの流れに沿った収録のどちらにしましょうか」と田村さんに聞いたところ、「どちらでも大丈夫です」とおっしゃっていただきました。最終的にはキャラクター別に収録していきましたね。

松原：素晴らしい演技力でした。新井さんのシナリオはもちろん、田村さんによるキャラクターの演じ分けにも注目していただきたいです。

「田村ゆかりさんが見事に演じ切った
“3人の鈴羽”をぜひ聞いてみてもらいたいです」

「ダルは本作における一服の清涼剤。 プレイヤーを和ませてくれる重要な存在です」

CREATOR
INTERVIEW

hukeさんのデザインで 振りきれたキャラクターに

——作品におけるダルの立ち位置を教えてください。
林：岡部の右腕ですね。縁の下の方持ちというイメージがしっくりきます。彼はけっこう使い勝手のいいキャラクターなんです。『困ったときにはダルを出せ!』という格言が僕の心の中にあります(笑)。
——紅莉栖と同じく非常に有能ですね。
松原：はい。あとは“一服の清涼剤”としての役割も持っていますね。場を白けさせたり和ませたりしてくれる彼の立ち位置は、意外と重要なんですよ。
——ダルは外見のインパクトもすごいんですね。
林：最初は『ロボティクス・ノーツ』に登場する昴のようなイメージだったのですが、hukeさんが「やっぱりデブキャラでしょう!」と、このデザインを上げてきたんですね。それだったらこちらも突っ切ろうと思い、今のキャラクターができあがりました(笑)。
——このキャラクター像がユーザーに受け入れられるのか、不安はなかったのでしょうか？
林：なかったですね。そもそも前作『カオスヘッドノア』の主人公である拓巳もあのような性格をしているし、今回はサブキャラクターなので振りきれても大丈夫だろうと思っていました。
——ダルと言えば『シュタインズ・ゲート』本編では、ある秘密が明らかになりますが、あの設定は最初から

考えられていたのでしょうか？

林：いえ、最初は単なる岡部のパートナーという位置づけでした。名前も橋田至ではなく工藤満(くどうみつ)で、“くどまん”という愛称でした。
松原：オカリンとくどまんのコンビでした(笑)。
——声優さんの演技はいかがでしたか？ 関さんというのは意外なキャスティングでしたが。
林：本編を収録していた頃はネットスラングを全然ご存知なかったですね。ただ『フェノグラム』の収録では自然に用語を使いこなしていました。だんだんダルに近づいているのかもしれませんが(笑)。
梶岡：ネットスラングは普段、口に出すことがないので、どう発音させるのが難しいんですね。収録では関さんと一緒に「ここはどう発音しましょう」「こういうパターンはどうでしょうか？」というやり取りをくり返して固めていきました。
——収録時に関さんのアドリブはありましたか？
梶岡：セリフの言い方が変わることがありますね。下ネタを謎の男前ボイスでしゃべったりとか(笑)。
——なるほど。そんなダルが主人公のシナリオというのもあまり想像できないのですが、いったいどんなストーリーになっているのでしょうか？
林：アニメの脚本を担当してくださった横谷さんに原案を手掛けてもらい、自分がシナリオを執筆しました。ダルのシナリオも紅莉栖と同様に、ト書きの部分を意識した内容になっています。ダルの頭の中身がわかる

ようになっているので、ぜひそこは楽しみにしてもらいたいですね。もちろん文中には彼特有のネットスラングがバンバン出てきます(笑)。
——それは楽しみです(笑)。
林：さすがに読んでいてドン引きしてしまうような内容は控えているので安心していただければ！
——ダル編では、後に彼の奥さんとなる阿万音由季との出会いが描かれるんですね。
林：はい。とはいえ、ダル編は完全にifストーリーになっています。由季とダルとの出会いはα世界線、β世界線、シュタインズゲート世界線で異なるのですが、今回のシナリオはそのどれにも属さないものになります。秋葉原を舞台に2人の出会いを描いたらおもしろいかな、というのが発想の原点ですね。
——このシナリオのあらすじからは、恋愛モノのようなイメージも受けました。
林：僕と横谷さんの中ではアームチェア・ディテクティブ(安楽椅子探偵)をイメージして作っています。そのため、恋愛というよりは謎解きの要素が多めになっていますね。
——「安楽椅子探偵」というと、現場に行かずに自分の頭の中だけで推理するタイプの探偵ですね。
林：はい。ダルの場合は自室のPCを駆使しながら事件を推理していくことになります。
——なるほど。
林：ちなみに最初にプレイする岡部のシナリオが本編の延長となるシナリオで、次にオープンする紅莉栖のシナリオとダルのシナリオが、それぞれ本編の裏側を描くシナリオと、ありえたかもしれないifを描くシナリオになっています。『フェノグラム』に収録される物語は基本的にこの3つのタイプで構成されています。

鈴羽の前に現れた2人の自分……それは幻覚か、それとも——

ラジオ会館にめり込んだままのタイムマシンが激しい雨によって故障し、もう過去へ向かえなくなってしまったとショックを受ける鈴羽。そんな失意の彼女の目の前に突如として2人の“自分”が現れる。1人は軍服姿で冷静な物言いと落ち着いた備えを備えた鈴羽で、もう1人はメイド服姿でどこか

お気楽な印象を受ける鈴羽だった。それは別の世界線の記憶なのか、あるいは鈴羽の幻覚なのか。まったくわからないが、そんな2人と橋田至の協力により、なんとかタイムマシン修理の目処が立つ。思いがけず時間ができた鈴羽は父・橋田至と交流を図るが……。 シナリオ：新井輝



▲自分が未来からやってきた娘であることを橋田に伝える鈴羽。さすがの出来事に橋田も混乱しているようだが、はたして彼は鈴羽のことを受け入れてくれるのだろうか？

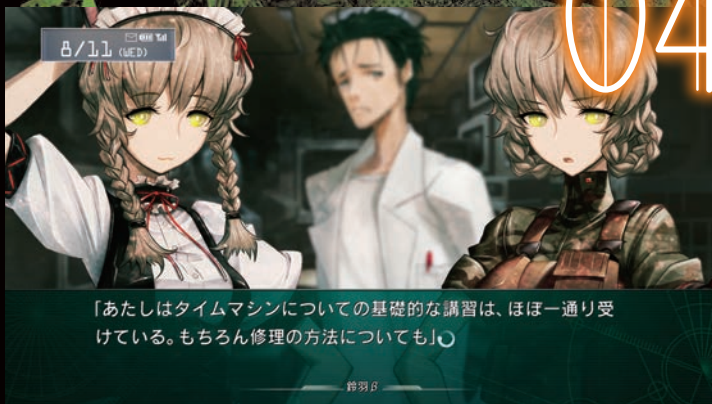
阿万音鈴羽

SUZUHA AMANE

ブラウン管工房でアルバイトをしている活動的な少女。その正体は2036年の未来からやってきたタイムトラベラーで、ネット上では「ジョン・タイター」を名乗っている。

幽霊障害のランデヴー

——阿万音鈴羽 Ghosting Rendezvous



「あたしはタイムマシンについての基礎的な講習は、ほぼ一通り受けている。もちろん修理の方法についても」

鈴羽

04

Actor's Voice

田村ゆかり氏 Yukari Tamura

鈴羽はとても強い子だと思います。物理的にも強いけど、精神的にもとても強い。もちろん、そこに迷いや悩みがないわけじゃないけど、それでも乗り越える力を持っている子なので、とてもまぶしい存在です。最新作は、これまでにとてもおもしろいお話がたくさんあったのに、ここでまた「このストーリーが来るのか!!」と、とても感動しました。ぐいぐいとお話にのめりこんでしまうくらいおもしろいストーリーなので、みなさんも楽しみにしていただくと嬉しいです！

